

私が幼稚園の子どもだった時

今度保育實習科に入つて、子どもに對してゐると、嘗つては、自分がさんかく遊んだ幼稚園の事が思ひ出されて懐しい。かう言うのと随分思ひ出がありさうだが、そんなにおぼえては居ないのである。

丁度私はあの頃田園調布に住んでゐた。其の頃の私は今とは全く反對に内氣な社交性のないような子供であつた。両親は近くに幼稚園が設立されたのを幸に、私を入れてしまつた。その幼稚園こそは、K氏のT高等女學校の附屬幼稚園である。

其の時の氣持は餘りよく覺えてゐないが、何しろ今迄、家にじつとしてゐた子供が急に幼稚園といふ所へ放り出されたのだから、之は田舎娘が都會に出て來たような恥づかしいような嬉しいような悲しいような氣持であ

つたらう、幼稚園が出来て最初の園児なのであるから勿論園児の人数は十二人であり、私と同年齡の子が七人あり後は皆年下であつた。七人の中でも女が三人男が四人あつて、女の子は良いにしても男の子と遊ぶ事は始めてなので随分色々泣かされたらしい。

何しろ泣きながら女中と幼稚園の門をくゞり、一旦先生の側へ來ると泣き止むらしいが又お遊びとなると男の子に色々されて直ぐ泣き出してしまふような子であつた。私は幼稚園生活が楽しかつたであらうか。それはわからない。餘り泣くので女中迄一緒になつて泣き出した事もあつたさうだ。今思ふと恥づかしい氣がする。幼稚園へ行くと、先づ最初にオルガンに合せて結んで開いて手を打つて……云々といふのを何回もやりそれからお部

屋に入り細工的な事をやらされたらしい。

特に幼稚園でやったものを今のぞいてみると折紙や細い紙で作ったもの等が多い。他に豆細工等はおそらくやったであらう。お遊びの時はお砂遊びおすべり、ブランコ等でジャンゲル等といふ氣のきいたものはないのである。此のお遊びの時は私はいつも男の子に泣かされては、其の時の一番若い嫁婦さんたる先生にすがりついて涙をぼろ／＼出してゐた。お遊戯はどんな事をやったかそれは覚えてゐないが、それをやる事は好きらしかった。

(以下略)

B 子

G 縣O市にあつたMミッションといふ名前のミッションの幼稚園であつた。

園長先生はYと云ふフランス人の女の方で背の高い優しさを素的な先生だつたと記憶してゐる。

園児の数は約三十人で嫁婦は三人だつた。朝とお歸りの時刻はこゝの幼稚園と同じ頃だつた。家から幼稚園迄は近かつたしお隣の方と何時も御一緒だつたので送り迎

へは別にしなかつたそうである。バスケットにはお辨當の他にお八つを持つて行つた様に憶えてゐる。

私の一番嬉しかつた事は、公園だつたか野原だつたか散歩の様な遠足に行く時だつた。又お遊戯室等なかつたのでお庭にオルガンを出してそのまはりに集つてお唱歌やお遊戯をした。私はお唱歌が大好きだつたらしい。

『お人形』や『日の丸』の歌等獨唱した様だ。

私は保育科に入る迄は幼稚園では今述べた事がお遊びであつて、お室で豆細工のブランコをつくつたりお人形をつくつたり折紙で鶴や奴さんを折り又ぬり繪をしたり繪をかいいたりする事がお勉強だと思つてゐた、だから一人で出来たのかしらと思はれる様な細工物を手に持つてお家へ歸るのがとても誇りだつた。

私は大きくなつてからも幼稚園というところすぐ豆細工の豆を嫁婦が煮てゐるのを聯想してたものだつた。そして幼稚園といふ處はいろ／＼細工を教へてくれるから小学校へ上つた時随分樂でいゝと思つた。

そしてたゞ遊ばせておくのはよい幼稚園ぢやない等い

つて小學校へ行つてからも幼稚園で教はつた事を自慢し合つたが豈はからんや、此の保育科で學んだ幼稚園の目的なるものをよく／＼考へて見ると、我々の自慢してゐた幼稚園は大分餘計な事を教へてくれたのだと思ふと共に今更の様にあの目的に實によく叶つてゐる此の女高師附屬幼稚園の園児を羨しく思ひ且つ責任の重い事を身に感ずるのである。

E 子

1、粗末な建物を第一に思ひ出します。

2、幼稚園のお花畑には眞赤なけしの花の澤山咲いてゐたこと。

3、楽しい遊びとしては、お砂場で、お山をこしらへたこと。(水を入れて砂をかたくして、)木の器に砂を入れて形を抜き出してお饅頭屋さんをして遊んだこと。

ぶらんこ、本校に遊びに行つたこと。ぬりゑ、おゑかき(特にぬりゑは好きでした)。お遊戯の後にするスキップ。粘土。

4、ばあやによく叱られたので怖い人だと思つてゐたこ

と。でも私がいつか鼻血を出してしまつた時洋服のよごれをすぐに洗つてくれました。

5、この頃ではお友達同士の呼び合ふのを聽いてゐると、「花子さん」、

「太郎さん」と名前で呼んでゐる様

ですが、私達はどうかだつたでせう。時々卒業の時の寫眞を見ると姓名が一緒に思ひ出される所を見ると、姓名を言つて呼び合つてゐたのではなかつたかと思ひます。「イチシマトシヲちゃん」とか「サノヨシコさん」とか言ふ風に。

6、私の組の時の先生はH先生でした。保育實習科からいらつしやつた方ではS先生と言ふ方だけを覚えてゐます。

7、豆細工、南京豆つなぎ等は私達の時にはあまりしなかつたからか一寸も覺えて居りません。

8、三月三日のお節句の時にはみんなで菱餅を頂いたこと。



9、實習科の先生にクローヴァで首飾りをこしらへて頂いたこと。本校に行つて随分クローヴァのお花をつみました。クローヴァのお花の臭ひをかく時何時も「幼稚園の臭ひがする」と言ふのです。

お遊戯の中で好きだったものは

雀の子、桃太郎さん、凧、水兵、飛行機、木の葉。もう忘れてゐたおうたでもお習ひしたものはまた思ひ出されて、何とも言はれぬなつかしい氣が致します。又お遊戯等も私の頃のと同じのが續けられてゐるのを見ると本當に嬉しう御座います。

G 子

私の家が父の轉任でN縣K町へ行つて間もない頃、私はお唱歌とお遊戯がとても好きだったので、幼稚園や園長さんのお名前は忘れましたが、近くのお寺の境内にある、幼稚園へ入れてもらひました。中途から入つたので何にもわからず、皆のするお唱歌やお遊戯は私の知らないものばかりだったので初めの二三日はとても厭でした。

殊に土地の子供達と言葉が違ふので心細い氣持ちでい

つばいでした。ですから今でも、長くお休みして居たお子さんの心細さが良くわかる様な氣がします。

又、「何て意地悪そうな強そうな子の澤山ゐる所なんだろう」と恐くて仕方ありませんでしたが、お唱歌やお遊戯がしたい爲に一日もお休みしないで通ひました。(中略)

或る時お庭で四組位に分れて、輪くゞり競争をさせられました。私は厭だと言つて泣きました。出来ないからと言ふより何とはなしにするのが厭で堪らなかつたのです。

ですから今ラヂオ體操をするのを厭だと云つて、どうしてもしない子も、あの時の私と同じ様な、言ふに言はれぬ氣持で居るのではないかしら、と時々思ひます。それから圖畫の時は、「先生が下圖をとつてあげるからお待ちなさい。貴女は何を書きたいの?」と聞いて廻ります。その番の來るまでおとなしく待つてゐるのです。そして番が來ると自分の書きたいものを言ふと下圖して下さいました。上手に出來ていゝと思つたこともありましたが自分の書きたいものを言ひ表すのに骨が折れました。

豆細工、貼紙等は先生のやつて見せる通りのものを作り或る物を観察して思ひの儘やるものではありませんでした。

又お辨當をお晝にお家から届けてもらう時など少し後れたりすると、先生が柱の所へ行つて「チリ〜、モシ〜何々ちゃんがお辨當を待つて居ますから早く届けて下さい」と電話の眞似をなさいますと、いつもすぐ届くので本當に不思議でした。

又、齒が痛くなると、先生が梅ぼしをつけて下さいますので私は、齒がいたくなればいゝ、など何度も思ひました。斯様にして、どれくらひだつたか忘れましたが、ほんの少し通ひました。

今でも子供達がやつてゐるお唱歌や遊戯の中に私の幼稚園時代にお習ひしたのがあると、あの頃を思ひ出して、懐しく又寂しく思ひます。

J 子

私の家から約半丁の所に幼稚園がある。

そのK幼稚園には、太つた金齒をずらつと竝べた世話

役のお婆さんと園長先生である所のO牧師と先生が二人許り居た。始業時間等、きつちり定つていて、朝禮の代りに「お早う先生御機嫌いかゞ、おはよ皆さま、ごきげんいかゞ」といふ歌をうたつたらしい記憶がある。その歌はその朝も幼稚園から聞えてくるので、はつきりおほえてゐる。

それがすむと小さい組と大きい組に分れて疊敷きのお部屋へ入り先生のお話をきいたり、貼り紙をしたりする。そしておやすみ時間にはお庭へ出て、ブランコとお砂場あそびと、すべり臺のどれかをするのである。

貼り紙といつても、折り紙でやるのではなく、あのかやく〜した色紙で丸や三角やおしどりや蝶々やサクランボなどに切りぬいてあるのがあたへられ、適當な所に適當なものをはりつけて足りない所はクレイオンで補ふのである。生來不器用な私は時々その奇抜な晝帳を出してみてもおかしくて吹き出してしまふのであつたが何かのはづみにそれをなくしてしまつた。

私が女高師の幼稚園を見て先づ驚いたのは時間的制限

を受けていない事である。確かに遊戯の連続を行つてい
る。

私は幼稚園に於て學校的訓練をうけて來た。その束縛
のない事である。程度の低い設備の整はぬ幼稚園をみな
れて來た私は、すっかり女高師の幼稚園に満足してしま



つた。

之丈の事を漸く思ひ出したが實察私は幼い頃の事をす
つかりわすれてしまつたのである。(以下略) K 子

(原文は一部修正、現代仮名遣いを使用した。編集部)

今回のアーカイブズは、昭和十三年(一九三八年)発

行の「幼児の教育」(第三八卷九月号、四五―五六頁)

に掲載された「私が幼稚園の子どもだったとき」という
記事である。保育者を志す十一名の「保育実習科」学生

(明記されていないが東京女子高等師範學校に間違いな
かろう)が寄稿した、自らの幼稚園時代の回想録だ。こ

こではそのうち六名の文章を抜粋転載する。ここでの序
文には、「将来幼稚園の先生にならうとしてその修業に
志した若い人たちが、自分等の幼稚園生活を思ひ出して
見たのも面白い。順不同(編集部)」とある。大正期の

幼稚園を、子ども自身がどのように過ごしていたかを垣

間見る資料ともなる。戦争の色濃くなる中、この人たち

はどのような保育者となつていったのだろうか。くしく
も連載中の「私の通った幼稚園・保育園」(現代版)と

二重写しの企画となつた。

☆この連載は、日本の幼稚園創設百三十年を迎え本誌の昔年の

記事を振り返り、現在の私たちの立ち位置を確認する作業の一
助にと企画したものです。